

令和元年6月22日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03028

研究課題名(和文) 『日本書紀』熱田本の史料学的研究

研究課題名(英文) Historiographical Study on Atsuta-Jingu's Nihonshoki

研究代表者

荊木 美行 (Ibaraki, Yoshiyuki)

皇學館大学・研究開発推進センター・教授

研究者番号：60213203

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、熱田神宮に伝わる熱田本『日本書紀』について、高精細の写真版をはじめ一般に提供するとともに、こうした貴重な写本が熱田神宮に伝来した経緯、各巻の写本系統、訓点について詳しく調査し、その考察を八木書店から刊行した『熱田本日本書紀』全3巻に掲載した「解説」で詳述した。こうした一連の成果は、今後の『日本書紀』の写本研究に大いに裨益するものと確信している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

熱田本『日本書紀』の全貌はこれまで未公開であったが、今回高精細写真による影印本を刊行することができた。これは、今後の『日本書紀』の写本研究に大いに貢献するところがあると思う。また、今回の調査によって明らかになった熱田本『日本書紀』伝来の経緯などは、この本のなかにわれわれの研究成果を併載したので、これによって、熱田本『日本書紀』の利用価値がいっそう高まったといえる。

研究成果の概要(英文)： We studied Nihonshoki which exist in Atsuta-Jingu and exhibited the photography version. We investigated the reason that these manuscripts was handed down to Atsuta-Jingu conversantly. We issued Atsuta-Jingu's Nihonshoki issued from Yagi bookstore. In this book, we explained our consideration in detail. So I'm convinced that such a sequence of outcome benefits future's manuscript study of Nihonshoki.

研究分野：日本古代史

キーワード：熱田本『日本書紀』 熱田神宮 訓点 時宗 神仏習合 金蓮寺 四代浄阿 円福寺

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

熱田本『日本書紀』は、『日本書紀』の写本のなかでも来歴の明確な古写本だが、全巻にわたる本格的な調査や高精細の写真撮影はこれまで実現しなかった。

2. 研究の目的

熱田本『日本書紀』の総合的な研究と、高精細の写真版の公開によって、学界に裨益する。

3. 研究の方法

交付された研究費によって、全巻の写真撮影を実施するとともに、あわせて全巻の料紙・訓点・紙背和歌を徹底的に調査し、熱田本『日本書紀』がいかなる系統の写本で、どのような価値をもつかを考察する。

4. 研究成果

今回の研究から、熱田本『日本書紀』についてさまざまな知見が得られたが、そのうち、以下に写本系統の問題と書写に至る経緯についてのべる。

(1) 熱田本の本文系統

熱田本の課題のひとつに、『日本書紀』諸本のなかで熱田本をいかに位置づけるのかという問題がある。『日本書紀』の写本は、ト部氏で書写されたグループ(ト部本系)とそれ以外(古本)に大別して理解されている。熱田本の本文系統は、巻第九(神功紀)でト部兼熙(1348~1402)の本奥書があるため、ト部本系の一つとして扱われてきた。これによれば、応安五年(1372)十月、ト部兼熙は子孫に伝える「証本」とするために巻第九(神功紀)を準備し、家で伝えてきた訓点を書写した。翌、応安六年(1373)正月には校合をしたとある。ト部氏の家学を伝える重要な写本をもとに、熱田本の巻第九が書写されたことが分かる。

しかしながら熱田本には本文や訓点、一書の書式など、細部では他のト部本系と異なる要素がみられる。たとえば、熱田本の傍注のなかには、他の写本にみられない私記(日本書紀私記)を記す例がある。

さらに巻第三(神武紀)にある墨による傍訓には、半切(第四紙「詔 所申反」)や万葉仮名の傍書(第四紙「唯々 越々」)があって、やはり他の写本では確認ができない。これら熱田本独自の傍注はどのようにもたらされ紙面に書き込まれたのか。私記・半切・万葉仮名の来歴は不明な点が多い。

熱田本のなかでも訓点は均一でないようである。巻第一上・下(神代上)と巻第二(神代下)では、書式(天地界と無界)・筆跡が異なり、訓点の面でも、巻第二は歌謡があるのに声調を付けていない(他巻では、線点・朱点・朱圈点・墨圈点などで示されていた)。したがって同じ神代巻とはいえ、熱田本の巻第一上・下と巻第二は別系統の訓点ではないかと思われる。ト部本系の人皇紀では、天文九年(1540)の奥書をもつ兼右本(天理大学附属天理図書館蔵、28冊)がよく知られ、日本古典文学大系本(岩波書店)で底本とされている。本奥書によれば、この兼右本は康永元年(1342)に書写されたト部兼員の本を底本としたことがわかる。兼員はト部氏とはいえ平野流であり、一五世紀に唯一神道を大成する吉田流とは異なる門流である。家学の変遷を歴史的にとらえ、一四世紀の段階でト部氏吉田流がどのような『日本書紀』本文・訓点を伝えていたかを考えるならば、熱田本ほど有効な材料はないはずである。

このような状況を勘案すれば、「ト部本系統」という写本の把握そのものが、ずいぶん大まかなカテゴリーであることが分かるだろう。そのため実際に本文校訂を行った研究者は「ト部本の一つとして扱われてきたが、形式的にも内容的にも異質なものを包含している」(『校本日本書紀』一、凡例)、「ことに傍訓は全体としてト部本系とは相違が認められる」(新編日本古典文学全集『日本書紀』一、解説)など、諸本のなかでの熱田本の位置づけに課題が残ることを提起している。

じつのところ、熱田本は『日本書紀』の校訂ではかならず参照される著名な古写本ではあるが、その全貌を目にする機会は限られていた。写真複製は紀元二千六百年を記念して橿原神宮が刊行した巻第三(神武紀)があるものの、現在ではすでに稀覯書である。各種の特別展等で熱田本が出陳されることがあるが、図版・図録であれば数点の写真掲載が限度で、本文校訂の要望には応えられない。やはり卷子16軸で紙背には和歌懐紙があるため分量・経費の面で課題があり、全巻の画像公開は困難だったのだろう。その結果、重要文化財指定の『日本書紀』写本のなかで、これまで全巻の影印版は刊行されていなかったのは熱田本だけであった。その意味でも今回の『日本書紀』熱田本の影印は、『日本書紀』の本文・訓点研究にとって大きな福音となること疑いない。

(2) 紙背和歌と卷子装の意味

『日本書紀』熱田本15軸を概観するため、表紙や本紙数、界線や紙背和歌など装丁を指標に整理したのが巻末の表である。熱田本の特徴は装丁にあり、第一に卷子装であること、第二に和歌懐紙を料紙に利用した巻のあることである。この二点は一体の意味をもつ。

今回調査した装丁から、熱田本を分類してみると、もっとも明快な指標となるのは、紙背の和歌懐紙の有無である。すなわち白紙に書写した一群(巻第一の上下、第二、第七、第八)と和歌懐紙を利用した一群(巻第三~第六、第九~第十五)に大別される。

まず和歌懐紙のない巻からみておくと、巻第一上(神代上)・第一下(神代上)・第二(神代

下)・第七(景行・成務紀)・第八(仲哀紀)の5軸である。これらの巻は熱田社の鎮座伝承と関連する。神代上第八段正文の八岐大蛇の下りにある「草薙剣」について、「本の名は天叢雲剣」「日本武皇子に至り、名を改め草薙剣と曰ふ」との分註がみえるからである。それが熱田社に由縁のある脇能になると、「日本武の尊、神剣を守る神となる。これ素戔嗚の神霊なり(草薙)」「辱なくも当社と申は、出雲国大社御一体の御事ぞかし」(源太夫)となり、中世ではヤマトタケルをスサノヲの再来とする言説がみられた。つまり神剣の由緒が語られる神代紀とヤマトタケルに言及のある景行紀・仲哀紀は、熱田社と直接関わる一連の伝承と理解され、『日本書紀』の他巻とは別の意識でなめられたことが考えられる。そのため特に区別して白紙を料紙として用いたのだと解釈されてきた。この推定が妥当であろう。和歌懐紙を用いない5軸は白表紙であることも共通する。

ただ5軸のなかでも、細かな相違点は存在する。同じ神代巻でありながら、巻第一上・下と巻第二は明らかに筆跡が異なる。巻第二は熱田本で唯一、界線を引かずに本文を書き写した軸である。巻第一上には裏に「三月廿九日尾張熱田亀井之道場書留」との朱書があり、寄進状以外で熱田の亀井道場(円福寺)に言及した記載は、この書入れだけである。

そのいっぽうで、巻第八(仲哀紀)には「南無阿弥陀仏 奉寄進 金蓮寺四世 永和三年七月日」との奉納奥書があり、和歌懐紙を用いた巻の奥書と変わりがない。白紙と和歌懐紙の巻で区別があるが、ともに金蓮寺が用意して熱田社に奉納された点は動かない。他方で和歌懐紙の利用は料紙の不足によるかといえ、それはけっしてありえない。表紙に続く第1紙は浄阿の和歌がくるのがほぼ原則であり、奉納者である金蓮寺四代浄阿に敬意をはらった懐紙の編成である。とくに巻第六(垂仁紀)の第一紙は他の料紙にはない幅の長さ(五八・三^ツ)で、唯一の一首和歌、それも浄阿の懐紙であるため特別に配慮されて裁断されないのだろう。連歌懐紙を使用して『大般若経』を書き写した実例を参照すれば、和歌懐紙の人名は『日本書紀』を奉納する企ての奉加者と解される。奉納事業になんらかの負担をしたことも考えられる。人名については久曾神昇氏の考証がある。

ところで最初に触れた永和三年霜月四日付け寄進状の料紙を観察すると、墨とみられる黒い粒子が確認された。漉き直しの料紙を寄進状に使用しているのである。縁のある人物の消息などを漉き込んで寄進状を記したことが想像でき、奉納事業に結縁するなどの積極的な意義がある。つまり『日本書紀』と和歌懐紙を一体にして残そうという意志が強い。この意志は熱田本が卷子装であることに貫徹している。一四～一五世紀に書き写された『日本書紀』の写本は、神代巻を除くと、北野本第二類(鎌倉期、北野天満宮蔵)・同第三類(南北朝期)・玉屋本(一五世紀書写、東京国立博物館)のように冊子の形態をとっている。家の証本として特別視された神代巻とは違い、講説や伝授に用いるのなら、披見に便利な冊子の形態が選択されていた。

これに対して熱田本はあえて卷子装にこだわっている。卷子であれば紙背の和歌懐紙をみることができるからである。熱田社に奉納する『日本書紀』に名号「南無阿弥陀仏」を記し、和歌懐紙を用いることは、神仏の喜ぶ法楽なのだと考えたのであろう。卷子装は奉納の意図に即した装丁だと考えられるのである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

遠藤慶太、垂仁紀の祭祀伝承 石上神宮をめぐって、古事記学、査読無、5、2019、pp103-125

荊木美行、『日本書紀』の元史料 - 大草香皇子事件をめぐって -、古代史の海、査読有、94号、2019、pp1-10

荊木美行、豊受大神宮の鎮座とその伝承、古典と歴史、査読有、1巻、2018、pp3-53

[学会発表](計2件)

遠藤慶太、六国史からみた文字と声、唐代史研究会夏期シンポジウム、2018

荊木美行、『日本書紀』の「別巻」をめぐって、日本書紀研究会、2018

[図書](計1件)

荊木美行、燃焼社、風土記研究の現状と課題、2019、240

遠藤慶太 他、八木書店、日本書紀の誕生、2018、520

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：大島 信生

ローマ字氏名：OHSHIMA, nobuo

所属研究機関名：皇學館大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：00194142

研究分担者氏名：多田 實道
ローマ字氏名：TADA,jitsudou
所属研究機関名：皇學館大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：00440834

研究分担者氏名：是澤 範三
ローマ字氏名：KORESAWA,norimitsu
所属研究機関名：京都精華大学
部局名：人文学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：20554075

研究分担者氏名：中條 敦仁
ローマ字氏名：CHUJO,atsushi
所属研究機関名：皇學館大学
部局名：教育部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：30556650

研究分担者氏名：宇都宮 啓吾
ローマ字氏名：UTSUNOMIYA,keigo
所属研究機関名：大阪大谷大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：40257902

研究分担者氏名：遠藤 慶太
ローマ字氏名：ENDO,keita
所属研究機関名：皇學館大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：90410927

(2)研究協力者

研究協力者氏名：平林 章仁
ローマ字氏名：HIRABAYASHI,akihito

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。